

争大作『U-571』やCGを駆使したデイズニー映画『ダイナソー』、古代ローマ帝国を描いた歴史スペクタクル『グラディエーター』といったアメリカ映画を上映している映画館の方へ足が向いてしまう。

現在、ハリウッド映画は、アメリカのロードショー期間から1～3ヶ月後に中国や韓国などの主要都市で公開され、半年～1年経ってから日本の各都市で公開が始まる。アメリカ国内において2000年上半期に上映された上記3作品について、日本国内では、『U-571』が2000年9月～11月公開、『ダイナソー』と『グラディエーター』が2001年春に公開される予定である。ハリウッド映画の話題作を身近な場所で早く見ようとするなら、当分の間は、お隣の韓国か中国・台湾・香港などへ行ってみることになる。それにしても、アメリカ映画を中国語、韓国語といったアジアの言語で楽しむ醍醐味もまた格別であるといえる。



アメリカ映画『U-571』『M:1・2』『グラディエーター』広告  
(上海市で、2000年8月)



東西ドイツが再統合されて10年目にあたる今年の8月末、久し振りにゲッチンゲンを訪問した。ゲッチンゲンはフランクフルトとハノーバーの間に位置する静かな町である。古い歴史を誇るゲッチンゲン大学と、4ヶ所のマックス・プランク研究所（特にそのうち一ヶ所には、ノーベル賞受賞者が二人も所属している）以外には取りたてて挙げるべきものもないような小さな町である。ゲッチンゲン大学には有名な数学者や化学者が多数在籍していたが、その内“ガウス分布”で有名な数学者ガウスのおかげで、10マルク紙幣にはガウスの業績とゲッチンゲンの古い教会が絵柄として採用されている。10数年前の約2年間、私はマックス・プランク実験医学研究所の化学部門で客員研究員として過ごした。

その時の研究仲間であり、かつそれ以来の友人夫妻がハノーバー空港に出迎えてくれた。おりしもハノーバーでは、20世紀最後の万国博覧会が開催されていた。不人気で入場者数が低迷していると日本でも聞いていたが、それを裏付けるかのごとくハノーバー空港は万博会場最寄の空港にもかかわらず閑散としていた。

友人夫妻は、私と共に万博に行く計画を立てていた。彼らは研究者の常として好奇心旺盛な夫妻で万博には興味を持っていたが、あまりの不人気のため、日本からの友人を案内するといった大義名分でもないと出掛けられない雰囲気でもあったのだろうか。そんなわけで、ゲッチンゲンに滞在中の一日、友人夫妻と共に万博見学に出掛けたのである。

30年前の1970年、日本で開催された大阪万博は大盛況であった。国内経済は上昇傾向にあったが、海外旅行はまだ高価の花であった時代である。地図でしか知らない多くの国が一堂に会する万博は、当時の日本人にとって世界への憧れや明るい未来を具現化してくれる場であった。この時アメリカ館では、アポロ11号が月から持ち帰った「月の石」が人気を博し、多くの人々が炎天下行列を成し、2,3時間の入館待ち時間を耐えていた。

あれから30年の時が流れ、社会情勢、経済状態等、世界は大きく変化した。大多数の日本人は海外旅行を経験し、またインターネットの普及により居ながらにして世界中の情報を手に入れることができる現在、30年前と変わらない運営形態での万博が、もはや人々の興味を引かないことに多くの説明は不要であろう。このような状況は当然予測されていたことであり、そのためかアメリカは賢明にも(?)不参加、また日本を始め出展しているどの国も極力押えた予算のなかで運営している状況がありありと見て取れた。

さらに閉幕までにはまだ二ヶ月を残すにもかかわらず、万博開催の赤字をニーダーサクセン州(ハノーバーが属する州)のみで背負うには巨額であると、ドイツ連邦すべての州で協力して解消する提案が示された。これには当然のごとく反対の声があがり、特にバイエルン州は声高に不快の念を表明していた。

短い見学ではあったがいずれの参加国においても、今回のテーマである「環境・未来」に対する明確な提案を出しきれず、考えあぐねている様子が明白な出展内容を見ていると、無駄な経済行為としか思えない万博は、20世紀と共に幕を閉じたほうがよさそうだ、との感想を抱いた。2005年の愛知万博も、開催するのであれば根底の発想から考え直す必要があるだろう。

今なぜ、ドイツは万博開催に名乗りをあげたのであろうか? ハノーバー万博への私なりの感想に対する友人の応答は、東西統一後の何となくちぐはぐなドイツの状況を嘆く独白であった。彼曰く、「一体ドイツは何をしているのだろうか?」。そして

さらに友人が話してくれたドイツの不可解な政策とは、エネルギーとITに関するものであった。

2025年までに国内の原子力発電は全廃し、クリーンエネルギーに変換することをつい最近表明したドイツでは、クリーンエネルギーとして風力発電を推進しているようである。アウトバーンを車で走っていると、そこそこに風力発電機が2基、3基と並び、プロペラがぐるぐると回転している風景は最早日常化している。そのドイツが、次世代のクリーンエネルギー源としてさらに採用したものに泥炭がある。国内には大規模な泥炭の鉱床が存在する。しかし鉱床の上には小さな町があるため、まずはその町をそっくりそのまま移住させ、その後泥炭の採掘を開始することにした。そして町の移住は既に始まっているとのことである。質の悪い泥炭をエネルギー源にするとは、どこがクリーンなのだろうか。大気汚染を解消できるような燃焼炉の開発で対処するのであろうが、それにしても環境先進国として名高いドイツの選択であろうか、とドイツ人自身にも不可解なようである。

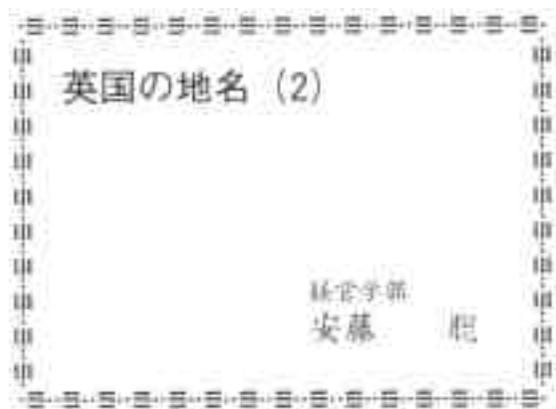
またIT革命が叫ばれている昨今、ドイツではコンピューター教育の遅れが目立っている。特に即戦力として活躍できる人材が不足しているため苦肉の策として、インドから2万人のコンピューター技術者の移住を受け入れる決定をした。8月には第一陣として20数名のインド人技術者にビザが発給されたとのことである。「ドイツはこの10年間、一体何をしてきたんだろう」、友人の嘆きは一



夜空に浮かび上がる日本館  
(ハノーバー万博にて、2000年8月)

層深くなるのであった。

EUによる通貨統合はドイツに対する外圧的戦後処理ともいわれている。確かに通貨統合後、マルクは弱体化した。しかし物価は安定し、少なくともゲッチンゲンでは変らない生活が人々を取り巻いている。過去への嘆きよりも、「ドイツはこれから何をやるのだろう」と、次の世紀への期待も心をよぎるようなドイツの底力を感じるの、私が日本人だからであろうか。



今回はスコットランドとウェイルズ編をお送りしよう。スコットランド語(ゲール語の一種)は現在では特にハイランド地方の一部と孤島にわずかに生き残っている程度であるが、地名の中にはいくらかでもその痕跡を辿ることができる。ウェイルズでは道路標識が二カ国語(英語とウェイルズ語)であり、イングランドとの国境には'Welcome to Wales /Croeso i Gymru' と併記された看板が必ずある。母国語としてのウェイルズ語話者も北部を中心に少なからず存在し、中には英語を全く解さない者もいて、我々日本人にとっては信じがたいことだが「英語をまったく話せない英国人」というのも確かに存在するのだ。アングロ・サクソン人の国であるイングランドに対してスコットランドとウェイルズ、そして隣の島アイルランドはケルト人の国であり、それぞれにイングランドとはまったく異なった文化を持つ。

小学校時代音楽の時間に「ロッホ・ローモンド」というスコットランド民謡を習った記憶がある人

も多かるう。この歌はイングランドで投獄されたスコットランド人兵士が処刑される前夜に故郷の湖を思って書いたものと言われている。湖の名前は「ロウモンド」で、「ロッホ」は「湖」を意味するスコットランド語である。従って有名な「ネス湖」は現地では「ロッホ・ネス」と呼ばれる。「ロッホ」は'loch'と綴り、「ホ」は英語にはない子音であるため(発音記号では'x'で表される)、イングランド人やアメリカ人などは通常「ロック」と発音する。スコットランドは湖が多い国なので、この単語はロッホインヴァー、ロッホナガー、ピトロッホリーなど多くの地名に見られる。

ロッホインヴァーの「インヴァー」は「河口」を意味するスコットランド語である。イングランドで言うポーツマス、プリマスの「マス」である。但しインヴァーの場合は語頭に来ることが多く、ネス川の河口の街はインヴァーネス、エスク川の河口にはインヴァーレスクがある。アバディーンの「アバ」もまた河口を意味し、この街は実際ディー川が北海に注ぐ河口に位置しているが、実際地名の語源となったのはこの川ではなく近くを流れるドン川である。何故なら旧市街である「オールド・アバディーン」はドン川の河口に近いところにある。グレンフィナン、グレンリー、グレンコウなどの「グレン」は「渓谷」を意味し、この'glen'は'loch'とともにスコットランド方言として英語の中に生き残っている。「グレン」よりも広い「渓谷」を意味する「ストラス」(strath)も方言として生き残っているばかりでなくストラスヘイヴン、ストラスクライドなど多くの地名を形成している。

ベン・モア、ベン・ネヴィスなどの「ベン」は「山」「頂上」を意味する。ベン・ネヴィスはスコットランドで一番高い山であり、ブリテン島全体でもこれが最大の標高を誇ることになっているが、それでもわずか1344mだ。一方「ダン」は「要塞」を表し、ダンディーは「デイグ(人名)の砦」、ダンバーは「丘の上の砦」、ダンケルドは「カレドニア人の要塞」を意味する。カレドニアは言うまでもなくスコットランドの古名である。「教会」を表わす英語'church'はスコットランド方言では